

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：王 暁（臨床心理研究コース）

| |
|--|
| ■ 研究題目 |
| 中学生における対象別評価懸念と過剰適応との関連について －日本と中国の比較を通して－ |
| ■ 研究代表者・分担者 氏名 |
| 王 暁（臨床心理研究コース）（研究代表者） |
| ■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など） |
| 1. 問題と目的 近年、青年期における過剰適応問題が取り上げられる。桑山（2003）は、過剰適応を外的適応が過剰なために、内的適応が困難に陥っている状態とし、不適応とともに適応の異常として扱っている。先行研究では、過剰適応が抑うつ傾向（石津，2007；益子，2009；加藤・神山・佐藤，2011）、強迫，対人恐怖心性（益子，2009）、不登校傾向（益子，2009；石津・安保，2010）などの不適応問題に関連していることが明らかになった。 過剰適応傾向がある子どもは他者から優れた評価を得ることを重視し、特に教師と親など目上の人たちを、否定的なイメージや評価を持たれては困る存在として捉えている事が予想される。また、思春期は、心理的に親から離れ、同性同年輩の親密な友人関係である chumship (Sullivan, 1954) が見られ始め、男女とも外見や行動が同じであることを重視するようになる（中澤，2000）。土井（2004）は近年における思春期の子どもたちが、周囲の人との関係に気を遣い、狭い範囲内に終始する友人関係のあり方をとっていることを指摘している。このように、この時期の子どもにとって、周りの人からの否定的評価に対する懸念は、他者評価に敏感である過剰適応傾向を促進させる可能性が考えられる。 一方、日中両国の対人関係上の文化的な特徴を考慮すると、過剰適応傾向に影響を与える要因が異なる可能性がある。本研究は、評価懸念を抱く対象を区別し、日中の中学生を対象に、評価懸念と過剰適応との関連を検討し、今後日中両国における過剰適応者への予防や介入に資するための知見を提示することを目的とする。 |
| 2. 実施内容 中国 A 市の公立中学校 1 校の生徒 597 名と日本 B 市の公立中学校 1 校の生徒 632 名に |

質問紙調査を実施した。質問紙は、①フェイスシート：学年、性別を尋ねた。②中学生用過剰適応尺度（石津，2006）③「おうちの人」の選択④対象別評価懸念尺度：白倉・濱口（2009）によって作成された対象別評価懸念尺度を用いた。分析には SPSS Ver.20.0 と Amos Ver.20.0 を使用した。主に、対象別評価懸念の下位尺度を独立変数、過剰適応傾向の5因子を従属変数と設定したモデルについて、国別の多母集団同時分析を行った。

3. 結果と考察

モデル全体の適合度は $\chi^2(2) = 20.646$, $p < .001$, $GFI = .996$, $AGFI = .851$, $CFI = .997$, $RMSEA = .087$, $AIC = 160.656$ であり、 $RMSEA$ がやや高いもののある程度の適合度が確認された。

(1) 友人に対する評価懸念から過剰適応への影響についての日中比較

日本においては友人に対する評価懸念は、過剰適応のすべての下位尺度に有意な正の関連を示しているが、中国においては友人に対する評価懸念は、「期待に沿う努力」以外、「自己抑制」、「自己不全感」、「他者配慮」、「人からよく思われたい欲求」に有意な正の関連を示していた。友人関係の発達過程から見ると、自己中心的な児童期とは異なり、思春期の子どもたちは、相手が何を考え、どういう感情をもち、何がしたくて何がしたくないかに非常に関心が向くようになる（Sullivan, 1954）。一方、伊藤（2006）は、中学生という時期の友人との付き合い方の特徴の一つとして、「互いの関係を壊さないように一生懸命気遣い、相手との距離を測ることに心を砕く子どもが多い」ことを指摘しており、中学生は自分の主張を抑えてでも友人に合わせようとする傾向がうかがわれる。

一方、特に人情を重視し、独特な「面子」文化を持つ中国では、「自分と相手を分けない」友情（陸，2001）や、友達同士にお互い大目に見たい（李，2006）という付き合い方の特徴が指摘されている。また、王（2009b）は日本人と比べて、中国人の交友観は親密感が重視され、友人への気配りが欠如していると指摘しており、中国での「友人に対する評価懸念」と「他者配慮」との間はかなり弱い関連と、「期待に沿う努力」との相関が見られなかったという結果を説明していると考えられる。

(2) 親に対する評価懸念から過剰適応への影響についての日中比較

日本では、親に対する評価懸念は「期待に沿う努力」に弱い正の影響を与えていることが示された。一方で、中国では、親に対する評価懸念は過剰適応に影響を与えなかった。思春期は、自分と似ている人間からなる環境が重視され、親の支配を離れた仲間を求める気持ちが熟す時期である（須藤，2014）。日中とも親よりも友人からの評価のほうがより重要視されていると考えられる。

(3)教師に対する評価懸念から過剰適応への影響についての日中比較

日本では教師に対する評価懸念と過剰適応との相関が見られなかったのに対して、中国では、教師に対する評価懸念は「自己不全感」、「期待に沿う努力」、「他者配慮」および「人からよく思われたい欲求」に影響を及ぼしていた。中国の中学生の学校にいる時間は日本より長い、学校で遊ぶことや部活動などをする時間が少なく、教師との接触時間の方が多いため、教師の影響力が日本の教師よりも大きいと考えられる。また、王（2009a）は、中国の儒教思想では「教不厳，師之惰」（教えるときに厳しくなければ、それは教師が怠けていることだ）という考えがあり、中国の教師は厳しく、支配的に指導をする傾向が日本より高かったことと指摘した。このように、教師からよく警告する、責める言葉を耳にする際、子どもは「私やっぱりだめだなあ」などのような劣等感を持ちやすいと考えられる。

本研究では、どのような相手に対して、自分の評価を上げようとする過剰適応行動を取りやすいのかについて日中比較を行った。その結果、日本の中学生は、友人からの否定的な評価に不安を感じやすく、自分の評価を高めるために過剰適応行動をとりやすいことが示唆され、今後日本の中学生における過剰適応への予防と介入をする際に、友だちとの関係や友達に対する意識を着目すべきであろう。一方、中国の中学生は、友だちだけでなく、教員からの否定的な評価に対する不安も過剰適応傾向と関連することが明らかになった。そのため、友だちと教員からの評価に対して、冷静に受け止め、客観的に自己を評価することは中国の中学生における過剰適応傾向を防ぐ可能性が考えられる。

4. 今後の課題

今回の調査では、中国人中学生のサンプルは東部沿海に集中しているため、この結果は中国東部の特徴が反映されていると考えられる。しかし、中国において経済が不均衡に発展し、東部と西部、農村部と都市部の間に大きな格差が出ている。そのため、今後は、より多様な地域から調査データを得ることによって、中国全体の過剰適応特徴を検討する必要があると考えられる。